

口一力放送局は 恵まれていて、という話。

よみうりテレビ西田二郎さんを皮切りに、今のテレビ番組制作を支えている方たちにインタビューしていくG-PRESS 2012 サマーセッション。第3号目は、前号フジテレビ宮道治朗さんに続き、北海道テレビ藤村忠寿さん。ローカル番組としては異例の大ヒット番組『水曜どうでしょう』はじめ、数々のドラマも手がける藤村さんは、プロデューサー、ディレクター、出演者…一人何役もこなすテレビマン。ローカル局で番組を作る藤村さんから見て、今のテレビ業界、番組づくりはどう映っているのだろうか。

聞き手・文/横江史義

今月の  な人北海道テレビ放送株式会社
エグゼクティブ ディレクター

藤村 忠寿さん

ふじむら・ただひさ／1990年北海道テレビ放送(株)入社。東京支社編成業務部でCMデスク業務を5年間勤めた後、本社制作部に異動。96年にチーフ・ディレクターとして「水曜どうでしょう」を立ち上げる。2003年からは同番組のDVD化を始め、現在までに18本を制作、累計450万枚以上の売り上げを記録。2008年からは、ドラマの演出を始め、09年のドラマ「ミエルヒ」は、ギャラクシー賞など数々のドラマ賞を受賞。



© 2012 Interactive Program Guide Inc. all rights reserved.

前回、フジテレビ宮道さんに「フジテレビらしさとは何か」といった話を伺いました。藤村さんにとって「北海道テレビらしさ」とは、どんなことになりますか。

北海道テレビに限らず、ローカル局には、全國ネットの番組とはまったく違う論理で番組作りができる醍醐味があります。それは、醍醐味だけではなく、使命でもあると思っています。番組制作はキー局からはじまり準キー局、ローカル局へというグラデーションで語られるものではありません。それぞれの局がそれぞれの独自の形をもつてます。キー局さんが「本流であるならば、我々は「脇道」。でも、それは本流に対する劣等感で申し上げるのではなく、「脇道だからこそ、堂々と自由にできることがある」という完全に「ポジティブ」な意味での「脇道」です。我々の場合、全国ネットにのらない番組をいかに作るか、ということにかかっています。そういうことです。

たとえば、ちょうど先日一つのドラマを作り終えたところなんですが、我々としては、かなりいいドラマが出来たという自負があります。震災後の日本に対してメッセージをしたかったことをかなり濃厚に伝えることができたかな、と。でも、全国ネットにのるドラマではないんです。なぜなら、キャストも個性的すぎますし、ロケもすべて道内、内容もどちらかといえばわかりにくい。ほんどのことが全国ネット番組の逆を行っているわけで。でも我々が作る番組はそれでいい、それがいいと思っています。

「とはいっても視聴率といつた「数字」は気にならないのですか？」

そこです。私は断言しますが、視聴率はまったく気にしていませんし、ローカル局は気にする必要がないと思っています。「視聴率を気にする」とこと自体、全国ネットの論理なのです。全国ネットの番組とローカル番組では、スポンサー料の桁もちがいますから、全国ネットの番組が視聴率にナーバスになることはやむを得ないことです。でも、そこには我々ローカル組まで同調する必要はないと思っています。正直、視聴率が数%違ったからといって、ビジネス的にもほとんどインパクトありません。視聴率を気にすれば、キヤストを気にする内容のわかりやすさを気にする、話題性をつくる演出を気にする…となり、制作者がメツセー

ジしたいことはどんどん後回しになってしまいます。そこで、私が一つの基準としてつけているのは「長く続く番組はいい番組である」といえると思います。なぜなぜ、若いためにも、誰かがきっと言わないといけないと思うんです。でも、「本流の人たちは言えません。心の中で思っていても立場的に言えません」だから、私のような「脇道」にいる人間がきつぱり言つべきなんです。今「テレビがつまらなくなつた」とか「似たような番組ばかり」という批判がありますよね。そこに風穴を開けられるのは、まさに視聴率を気にしないといつた数字で番組の価値を計つていながらも関わらず、いまだにその古い指標に振り回されている。不自由で、時代遅れとなる人も関わらず、いまだにその古い指標を誰もが思っていても、それに代わる指標がない限り、振り回されざるを得ない。それに対しては、ローカル局は、自由に時代に機敏になれる身軽さがあると思います。ただ、出来る人間が何人いるかだけなんです。

「藤村さんと同じような意識を、ローカル局のみなさんは持たれているのでしょうか？」

残念ながら、そうとはいえないかもしれません。ほとんど的人は「ローカル局は恵まれていない」と思っているでしょうね。番組制作費が低い、よって著名なキャストも起用できない、大規模なロケも行えない…だから恵まれてい

水曜どうでしょう

How do you like wednesday?

「藤村さんにとって「いい番組」とはどういう番組ですか。」

一義的ではありませんが、私が一つの基準としてつけているのは「長く続く番組はいい番組である」といえると思います。なぜなぜ、若いためにも、誰かがきっと言わないといけないと思うんです。でも、「本流の人たちは言えません。心の中で思っていても立場的に言えません」だから、私のような「脇道」にいる人間がきつぱり言つべきなんです。今「テレビがつまらなくなつた」とか「似たような番組ばかり」という批判がありますよね。そこに風穴を開けられるのは、まさに視聴率を気にしないといつた数字で番組の価値を計つていながらも関わらず、いまだにその古い指標に振り回されている。不自由で、時代遅れとなる人も関わらず、いまだにその古い指標を誰もが思っていても、それに代わる指標がない限り、振り回されざるを得ない。それに対しては、ローカル局は、自由に時代に機敏になれる身軽さがあると思います。ただ、出来る人間が何人いるかだけなんです。

実は、そこに、ローカル局の活路があるのかな?と。視聴率にこだわるだけだったら、DVDが毎回10万枚も売れているんです。ちょっとと懶慢ですけど(笑)。

実は、そこに、ローカル局の活路があるのかな?と。視聴率にこだわるだけだったら、二次のセールスに広がらなかつたんじゃないかな?と思つんです。信じて伝えた結果がテレビの視聴率ではないところで評価を受け、新たな展開を生む、これって電波のもうひとつ健全な形じゃないですか?

※続きは「G-PRESS 2012 Summer Session」